



有田の赤絵窯の

謎をひもとく（後編）

朝鮮半島・李朝の技術をもとに開発された有田磁器には、当初色絵の技法はありませんでした。しかし、1640年代の中頃、明から清への王朝交代の混乱で、磁器の輸出もままならない中国に代わり世界展開をもくろんだ有田では、当時最高峰の景德鎮と同等品の生産を模索しました。この時、李朝色の残る製品のスタイルを景德鎮風へと一変させ、また、欠落していた色絵の技法も開発されたのです。

前回、赤絵窯は二重構造で、それぞれ外窯、内窯という名称が冠されるものの、実際には一体成形で、そう呼ぶことの意味は乏しいことを記しました。しかしそれには、とある理由があったのです。それは、色絵磁器の開発に際しては中国系の技術が援用されたものの、素地から焼成に至るまで、かなり独自の技術・技法で工夫が凝らされています。赤絵窯も中国風を直摸したのではなく、従来から国内にあった円筒形の素焼

き窯を応用したのです。この素焼き窯と赤絵窯は、唯一の差は内窯の有無で、側面から見ると何らの違いもありません。ところが、この内窯は、当初は外窯との一体成形ではなく、素焼きの甕状を呈するまったく別個体の窯だったのです。つまり、素焼き窯の中に、製品を詰め内窯をはめ込んで使ったというわけです。内窯がややくびれた甕状の口縁形を呈するのは、おそらく重い内窯の首部に縄をかけてつり上げ、外窯の中に降ろしたためだと推測されます。この方法は、近代にも大型の壺などの窯詰めの際に行われています。

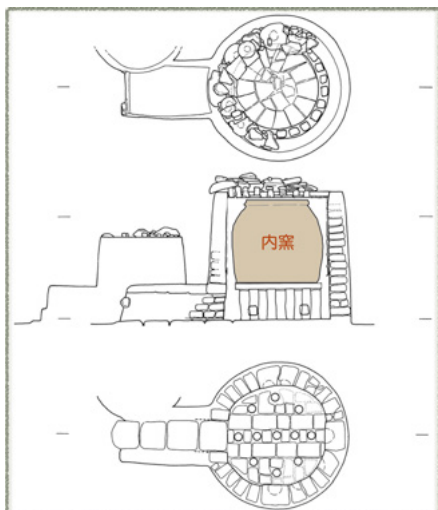
内山では1650年代中頃から分業化される赤絵屋も、実は上絵付け工程だけではなく、人形類をはじめロクロを使用しない押し型成形の製品については、製土から一貫して行っていました。つまり、製品や土型を素焼きするための窯も工房内に必要だったのです。ところが、1680～90年代頃には、有田全体で上絵付け工程

の分業化が図られました。そして、これを契機として、赤絵屋は上絵付け専門業者となったのです。専門業者となった赤絵屋に、いちいち重い内窯を出し入れする手間は無用かつ非効率です。かくして、外窯と内窯を一体成形した、今も残るような赤絵窯が考案されたのです。ただし、これは有田の窯業の事情に合わせた改良ですので、たとえば、錦窯と呼ばれる京都や九谷の色絵焼き付け用の窯などとは無縁です。つまり、有田で独自の窯構造なのです。こうした有田の歩みを今に伝える貴重な素材を、一つでも多く守り、後世に伝えていくことが大切ではないでしょうか。

(村上)



「陶磁器説圖」の素焼き窯（『陶器全集』第四巻 思文閣 1976 より引用）



内窯脱着式赤絵窯模式図

皿 季刊 山

No.133

春
2022

令和5年度『全国重要無形文化財保持団体協議会 佐賀・有田大会』に向けて～ Vol.5

令和5年度に開催される大会に向けた連載の第5回目です。前回お伝えした通り、「染織」の団体を取り上げています。今回は、「結城紬」と「久米島紬」の2団体に、自己紹介していただきます。

結 城 紬 本場結城紬技術保持会

○保存会について

本会は、前身である本場結城紬技術保存会が国の無形文化財への指定を目指し、昭和31年に発足したものです。その後、文化財保護法の改正による指定方法の変更に伴い、昭和51年(1976)に本場結城紬技術保持会と名称が変わり今日に至ります。本場結城紬の製造に20年以上携わっている熟練の技術者が、研究会の開催や後継者育成事業を実施し、伝統的技術の保存・伝承に取り組んでいます。

構成員：文化財指定要件別に、糸つむぎ^{かすり}19名、緋くくり^{ちばたお}26名、地機織り^{ちばたお}30名の合計75名。

○重要無形文化財の指定要件

名称：本場結城紬

指定：昭和31年（1956）4月24日

1. 使用する糸は、すべて真綿^{まわた}より手つむぎしたものとし、強撚糸^{きょうねんし}を使用しないこと。
2. 緋模様^{もよう}を付ける場合は、手くくりによること。
3. 地機^{ちばたお}(いざり機)で織ること。

○重要無形文化財の特徴

本場結城紬は、糸つむぎから機織りまで40以上の工程を全て細やかな手作業で作られています。

蚕^{かいこ}の繭^{まゆ}を煮て柔らかくした真綿^{まわた}から手で撚らずに紡ぎだす絹糸^{かいこ}を使い、経糸^{たていと}の端を腰に巻き腰の力を利用した地機^{ちばたお}でバランスよく織り上げることで、軽くて暖かい独特の風合いに仕上がります。親子三代で着られるといわれるほど丈夫で、着るほどに柔らかく風合いが増します。また、緋くくりによって1本1本の絹糸に施される精緻で美しい模様も結城紬の特徴です。

○重要無形文化財及び保存会の歴史

結城紬^{あしぎぬ}は、奈良時代に茨城県北部で織られていた「絶」という絹織物が起源とされています。絶の技法と、植物繊維を製織していた結城地方の技法が合わさって常陸紬^{ひたち}が誕生し、鎌倉時代^{かまくら}には、諸国名産として数えられるようになりました。江戸時代^{えど}から結城紬と呼ばれるようになり、当時の百科事典では最高級の絹織物として紹介されています。慶応年間(1865-1868)には

緋くくりが導入され、精緻な緋柄が入った現在の形の結城紬となりました。最盛期は昭和50年代で、結城紬を題材とした朝ドラマの影響もあり、年間3万反以上が生産されました。また、平成22年にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。

○近年の試み、伝統を守るうえで心がけていることなど

本場結城紬は糸つむぎ、緋くくり、機織りの各工程を分業制で担ってきました。近年、技術者の高齢化が進んでいることから、複数の工程に携わることのできる後継者の育成に取り組んでいます。また、若い世代に結城紬の歴史や技術を伝えていくため、高校の授業や部活動、中学生の着付け体験など若者の興味を引く活動を始めています。



結城紬 製品



中学・高校生による体験



糸つむぎ



機織り

○保存会について

久米島紬保持団体は、久米島紬の技の保存と伝承者の養成を図ることを目的として設立された団体で、昭和52年10月「久米島紬」の工芸技術が沖縄県の無形文化財に指定されたことに伴い、その保持団体として認定されました。その後平成16年9月に国の重要無形文化財に指定され、現在に至ります。

現在の構成員は、伝統的な久米島紬の製作に優れた技術を有する12名の技術者です。

○重要無形文化財の指定要件

名称：久米島紬

指定：平成16年（2004）9月2日

1. 糸は、紬糸または引き糸を使用すること
2. 天然染料を使用すること
3. 緋糸は手くりりであること
4. 手織りであること

○重要無形文化財の特徴

久米島紬は、原材料に真綿から紡いだ紬糸を用い、デザインからはじまる全ての行程を一人の織手が手作業で行います。豊かな島の自然の産物を活用しているため、染められる染色に大きな特長があります。紬糸の風合いと植物染料、泥染めが響きあい、豊かな島の自然をぎゅっと濃縮した織物が久米島紬です。

○重要無形文化財及び保存会の歴史

久米島で紬がいつから織られていたかははっきりしませんが、久米島紬の原料となる蚕の飼育は、島の古い文献などから15、6世紀までさかのぼるとされています。東シナ海に浮かぶ久米島は、古くから海上交通の要となる島で、さまざまな文物がもたらされました。養蚕も久米島紬の素地も同様に海を渡って伝わったとされ、島の恵まれた自然環境と合わさり、17世紀頃には現在の久米島紬に近いモノが製造されていたと考えられています。その技法は頑なに守られ、今日まで受け継がれてきました。

○近年の試み、伝統を守るうえで心がけていることなど

保持団体の会員は、代表を筆頭に12名。その下には伝承生が8名おり、日々、久米島紬の手わざの研鑽と伝承に励んでいます。

保持団体を中心となり行われる年2回の養蚕の際には、地域の学校にも呼びかけて見学を受け入れる他、希望する学校には蚕種を分け、保持団体構成員が学校に赴き、養蚕指導や糸取り、染色、織りなどの指導を

直接行う等、学校現場においても伝統文化の普及、保護、継承の意識の醸成に寄与しています。



養蚕



染色

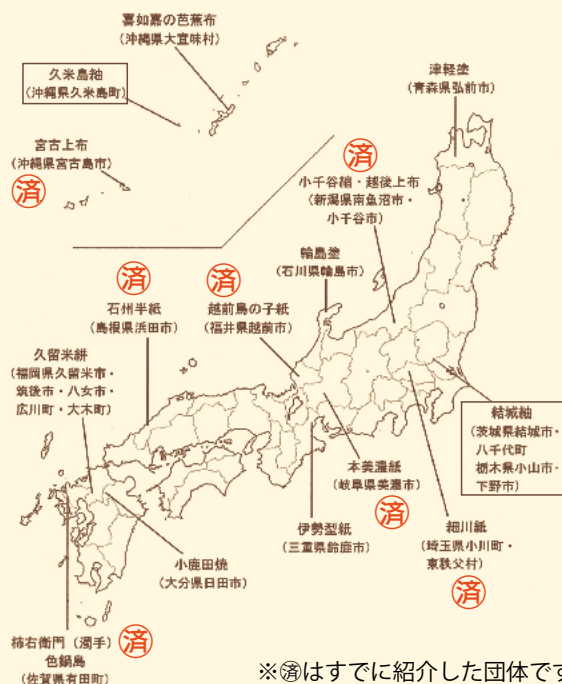


泥染め



経巻き

重要無形文化財及び関係市町村一覧





令和3年度企画展 有田内山重要伝統的建造物群保存地区選定30周年記念 そうだったんだ！ 有田内山まるわかり

【内容紹介】

令和4年1月22日(土)から、今年度の企画展が始まりました。コロナ第6波の真っ只中での開催となりましたが、町民向けの展示内容だったためか、多くの方に、1度ならず2度、3度とご来館頂いています。そこで、この展示内容を少しご紹介したいと思います。

第1章 やさしく学ぶ@江戸の内山

第1章では、そもそも内山地区はどういったあゆみで成立したのか、その経緯や、内山の地区名の変遷、人々の生活や風習などを、当館が保有する大正時代の古地図や江戸期の出土資料などとともに詳しく紹介しています。さらに、約160年前に描かれた安政6年(1859)『松浦郡有田郷図』(佐賀県立図書館蔵)と現在地図とを比較し、そのまま継承されたものや、変化があるものについてクローズアップしています。

第2章 やさしく学ぶ@近代の内山

第2章では、内山の近代化について、当館が所蔵する内山特有の民俗資料とともに、パネルで紹介しています。未だ江戸時代の風習が混在しつつも、そこから脱却を図る近代の内山の姿をご覧ください。

第3章 やさしく学ぶ@内山の町並み

第3章では、平成3年に国の重要伝統的建造物群に選定された内山地区について、その制度や範囲を改めて紹介するとともに、内山地区に現存する伝統的建造物の特徴や、当館が保有する古写真などを分かりやすく展示しています。特に地区内の表通り、県道281号線沿いの家屋一軒一軒の、現在の写真(令和3年)、30年前の写真(平成3年の選定時)、160年前の絵図



(前述『松浦郡有田郷図』)と比較したコーナーは必見です。

会期中は無料となっています。内山地区を詳しく知るまたとないチャンスです。ぜひご来館をお待ちしています。



企画展展示風景

【販売図録の紹介】

このほど、開催中の企画展の内容を、丸ごと紹介した図録を刊行しました。大変好評ですので、この機会にぜひお求めください。



- 販売場所 有田町歴史民俗資料館東館(泉山)
- 販売価格 1冊 800円
- ページ数 46ページ、フルカラー

【会期延長のお知らせ】

現在開催中の企画展について、町民の方より会期延長を望む声が多く寄せられたことを受け、下記のとおり会期を変更します。どうぞ、ゆとりをもって何度でもご来館ください。

- 変更前 令和4年1月22日(土)～令和4年2月27日(日)
- 変更後 **令和4年1月22日(土)～令和4年4月10日(日)**
※4月11日(月)～13日(水)は、常設展示への復旧作業のため休館します。

【ワークショップのご案内】

現在開催中の企画展にあわせて、町家の模型作りワークショップを下記の日程で開催します。まだ余裕がありますので、希望される方はお申込みください。

- 日時: **令和4年3月19日(土)** ①10:00～ ②14:00～
- 場所: 有田焼参考館(有田町歴史民俗資料館東館奥)
- 対象: 小・中学生
- 参加費: 無料
- 内容: 内山地区内にある伝統的建造物200分の1サイズの模型を一つ作成します。
- 募集人員: 各回8名
- 申込み: 0955-43-2678
- ※新型コロナウイルスの感染状況により変更・中止する場合があります。

季刊『皿山』

通巻133号(令和4年3月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185
URL: <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>